5. コロンビアの体質４

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

５）先住民２

今回は、先住民の価値観の一例として、クナ族について述べることにする。なぜクナ族かと言えば、パナマ国側のクナ族の数十人が天理教コロンビア出張所に毎年訪れたこともあり（2015 ～ 2020 年）、その関係で２度ほどパナマシティ近郊の彼らの居住地区を訪れたことがあったからである。

＊クナ族について

クナ族はアメリカ（南北）先住民の一種族である。現在の彼らの共同体は、コロンビアの北西側、「チョコー県」とパナマ国の中に数カ所存在している。数の上でははるかにパナマの居住者が多い（パナマでは現在約８万人）。[(1)] しかし、もともとクナ族の起源はコロンビアにあった。スペイン人の征服の影響で、コロンビアを追われてパナマまで移住を余儀なくされた。もちろん少数のクナ族は、コロンビアで暮らし続けていていた。18 世紀頃、大陸では疫病や爬虫類昆虫類の害が多いため、それを避けるため次第にサンブラス諸島(先住民語でクナジャラと言う。以下クナジャラ）に移った。そこは小さな島が 300 以上あるところで、有人島は 70 くらいあるという。海水がきれいなところで、米国、ヨーロッパ、日本からも訪問客が絶えない観光地の一つである。

＊クナ族の移住

以前にもふれたが、中南米の諸国形成の共通項である「近世におけるスペインの征服」の歴史もまた、クナ族の移住と密接に関係がある。もともとコロンビア北西部に居住していたクナ族は、スペイン人征服者の攻撃を受けて徐々にパナマのカリブ海側に移り住むようになったが、天然痘やマラリアをもたらす害虫や毒蛇などから身を守るために、徐々におそらく 19 世紀頃にはクナジャラに移住するようになっていった。[(2)]

しかしながら、クナジャラは極小の島の集まった国土である。地球温暖化の問題もあり、水没の危険性がある。また人口が増加傾向にあるが、土地は増やすことが出来ない。人口が増えるとなるとその養い、すなわち経済的存続が現実問題となり、クナ族は島のクナジャラからパナマシティ（首都）近郊に次第に移住して、彼らのコミュニティーを形成するようになってきている。種族の全人口８万人のうち、すでに５万人ほどは都市近郊のコミュニティーに住んでいるという。[(3)]

現在その首都近郊の共同体は８地区存在するという。その一つに「ダガルクン」という共同体があり、その責任者で役員の一人に天理教と関わりを持ったワゴ・メンデス氏がいる。このダガルクン地区はパナマシティから約 40 分のところに位置する。パナマの行政地区名ではチュミカル地区という。幹線道路からこの地区に入るのだが、舗装道路はこの幹線道路までであり、その先は舗装されていない道路だった。

＊クナジャラ以外の共同体

正確な統計はわからないが、この地区の人たちの一世帯あたりの人口密度は高い。１世帯あたり大概３世代、祖父母その子供の家族が住んでいる。私が滞在した家は 50 代の祖父母とその４人の娘家族が同居していた。４つの部屋があり、各家族が一部屋の計算になる。その部屋に６～７人が居住しているのである。その家は全部で 28 人住んでいた。部屋にはベッドが一つもしくは二つ置いてあり、そのベッドの上で子供も大人もみんな寝る、と思いきや、クナの習慣かパナマの習慣かわからないが、ハンモックもあり、そこでも寝起きしている。だから、といってはどうかと思うが、「共有」ということが、全てにおいてあてはまるようである。

＊女性社会

衣食住が共有と言っていいだろう。食は、決して買い溜めをしない。たとえ面倒であってもその日、みんなが食べられる分のみを買ったり、作ったりしている。祖父母が作って、後の者が消費する。そしてその統制は祖母やその娘、すなわち母親が取っている。

隣近所も似通っている。決して暮らしはよくない。トイレも水洗ではない。洗濯機はない。しかし、パソコンはある、最新モデルのスマートフォンを持っている。WiFi が完備されているので、地区中どこでも繋がる。これは政府がネット環境の整備を奨励しているおかげだという。子供たちは裸足で、けれどスマートフォンを操作し、何かちぐはぐだ。けれども素直である。

クナ族のモーラ（刺繍）の文様

女性（母親や祖母）が子供たちの面倒をみたり、伝統工芸のモーラ（刺繍）を作ったりしている。中堅どころの男性や女性は、その多くが都市へ働きに行っている。パブロという男性は、「私は子供が４人いる。朝３時に起きて、５時にはパナマシティのショッピングモールのファーストフードに到着する」と言う。彼は夜の９時頃に帰宅する。「仕事があるだけマシなんだよ。これも当番で、週に３回がこのルーティンだ。」と、真面目な顔で語った。

「ダガルクン」では、幼稚園から小中学校までの教育が行われている。しかし、授業があるのは午前中のみである。男性は都市部に働きに行き、女性は朝から晩までモーラを編み続けている。このモーラは独特の模様を持ち、それは作成者（女性）のイマジネーションによるものであるが、自然をモチーフにしているという。[(4)]

＊和の共同体

村の重鎮であるワゴ氏の仕事は「芸術家」だった。絵画を売ったり、また学校で美術を指導したりして、生活を支えていた。現在は彼らの故郷の「クナジャラ」に訪問する観光客相手に、自分のボートで食料や乗客運搬などをしながら生計を立てている。（現在は、おそらくコロナウイルスの影響もあって、業績も落ちていると察する。）ワゴ氏は次のように彼ら独特の神の概念を語ってくれた。

「私たちは、日本の《和》ということに大変近い価値観を持っています。個人よりも家族や集団が大事なのです。まあ最近の若者は週末にそれぞれ騒いで個人的なパーティをしていますが……。私たちの神の観念は父と母であり、そこから世界が創られた。私が天理教の教えにひかれたのは、この部分が同じだったからです。」

クナ族の年配者たちは、スペイン語よりもクナ語をよく使用する。スペイン語を全く話せない女性もおられた。クナ語はコロンビア種族のチブチャ系だという。

［参照 URL］
（1）Monica Martinez Mauri, http:/revistaes.uab.cat/periferia
（2）同上
（3）同上
（4）https://www.cuco.com.ar/molas.htm